
魔法少女リリカルなのは の騎士

トルネード

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは の騎士

【Zコード】

N7763K

【作者名】

トルネード

【あらすじ】

なのはの世界に転生した少年八神一真はとある事件がきっかけで、デジタルワールドのオメガモンの肉体を手にする。
デジタルワールドで戦いの日々を送っていた彼は、悪しき存在を追つて再びなのはの世界へと帰ってきた。

プロローグ（前書き）

はじめして。私はトルネードと申します。

この度此処で小説を書かせて頂く事になりました。

好きな物語を絡ませたいなと思い、デジモンとなのはを混ぜた二次創作の小説となつております。そしてこの小説は完全に作者の妄想を書いたモノですので、お気をつけてお読みください。

初めて書くのであまり文章能力はありませんが頑張ってまいりますのでよろしくお願ひします。

尚、この作品のデジモンは基本的に人型のデジモンは大きさは2m～3m程の大きさで考えて書いていますのでよろしくお願ひします。

（主人公のオメガモンも）

：大きくも成れますけど力をセーブしてるみたいな設定にしてあるモノですから。

更新は遅いと思いますがよろしくお願ひします。

プロローグ

その村は平和な村だつた。

周囲を森と川という大自然のバリケードで覆い、外敵からの襲撃に備える。

また、綺麗な空気と綺麗な水が生み出す食物も豊かに育ち、そこに住む命もその大自然の揺り籠に揺られて時に厳しく、時に優しく育まれていく。

そんな…そんな…素敵な村の筈だつた。

だが、今現在その村は、豊かな自然もそこに住む命もなにもかもが失われていた。

悪意ある命一つ。

たつたそれだけの為に…。

あるいは只只、燃え上がる紅蓮の炎。

そして、かつてそこで育まれていた命達の絶命の叫び。

そんな村の中でからうじて、無事だつた二つの命は荒れ果てた教会へと逃げ込んでいた。

この村が出来た時に、この世界の神に使える騎士を祀りあげた伝統ある教会だつた。

天井には色鮮やかステンドグラスがあり、その騎士が悪しき存在と戦っている光景が描かれていた。

だが、その教会も壁には悪意ある命が放つた攻撃により大きな穴が空き、祀りあげていた騎士の石像もその右半身は、吹き飛ばされていた。

まるで、逃げ込んだ小さな命に対し、この世には神などいないと絶望と言う事実を叩きつけているかのようだつた。

それでも、尚その二つの小さな命はその石像の前で助けを求める様に身を寄せ合つていた。

「恐いよ… 兄ちゃん」

「心配するな。兄ちゃんが守るから」

ツノ生えたの玉状の姿をした生き物「ツノモン」はその大きな瞳に涙を浮かべながら、兄と呼ぶ、似ても似つかない黄色い小さな恐竜の様な生き物「アグモン」の胸元へと顔をうずめる。アグモンもそんな恐がるツノモンを力強く抱き締めると、守ると言い聞かせその体を指とも言えない鋭利な爪の横で傷つけない様にゆっくりと撫で始めた。

この村で自分達を守つてくれていた存在達は既にその命を終えていた。

平和だった村を襲撃してきたたつた一体の謎の敵。その存在に全てその命を奪われていたからだ。

(「守らないと…俺が…」)

アグモンはより強くツノモンを抱きしめる手に力をいれるとそう心の中で呟いた。

幸せだった。

村が焼きつくされ、今尚自身の命と自らを兄と慕つてくる弟分の恐がる姿を見てアグモンは初めて今まで自分がいかに幸せな生活を送つていたかが分かった。

決してこの村は大陸の中心にある様な街とは違い、自然以外何もないそんな田舎のある村だった。

決して裕福と言える生活でもなかつた。だが、餓えて死ぬといつこともなかつた。

只只、自然と調和し、ゆっくりと時間が流れる。そんな村だった。だが、まだ若いアグモンにとって、それはつまらない村の一言で済ませていた。

刺激が足りない。もっと自分の力で何かがしたい。

大陸の中心にある街というのは未知なる世界。時折村にくる行商人から聞く噂を聞いているだけでワクワクした。

アグモンにとっては、そんな街は開拓地フロンティアだつた。

そんな世界に憧れを抱くのも無理もない年頃だつた。若者なら無理もないだろう…。

だが、自身にはツノモンという自身を兄と慕つてくる小さな弟分がいた。

この村では生まれた命は、若い命がその命を守り、しつけ、そして導いていてやる撻がある。

その為、表向きアグモンは仕方なしに村の撻に従い、街には旅立らず…その不満をつのらせて生活していた。

だが…そんな不満をこの村に募らせていた自分に今この時本当に嫌気がさした。

この村は確かに刺激がないのかもしれないけど…それでも自身が生まれ育つた村だ。

なにより、この村には決して今この村を蹂躪している様な悪しき存在は一人もいない。皆優しい者ばかりだつた。噂では村の外では平気で悪意を働く存在がいるという。そんな存在、自分は平氣だとアグモンは思つていた。

それが、いかに愚かで甘いことだつたかを思い知つた。

そんな愚かなアグモンを優しく諭した存在が多くいた。

この村はそんな優しさを育めるそんな村だつたのだ。街の様な刺激はないのかもしれないが、それでも優しさを育むという場所としてこの村はとても素晴らしい場所なのだと…。

それに気付いたからこそ今この場でアグモンは決意した。ツノモンだけは絶対に守ると。

今は亡き命達がかつて自分にしてくれたように。その瞬間だつた。

二体の耳に大きな音が響いた。

何かが力づくでレンガで出来た教会の壁を壊したのだ。

レンガを積み立てて出来た壁に、より大きな穴が空くとそこに砂塵が広がる。

そこから何か大きな影が浮かび上ると、ゆっくりとそれでいて乱暴に教会の中に現れた。

「マダ…イキテル?」「ロ…ス」

「ひつ…!?

ツノモンはその姿を見ると怯えた様に声を上げる。

アグモンはツノモンを恐がらせない為に、必死に恐怖を隠していた。無理もない。

その姿は悪魔そのモノだった。

片言な言語を発する口、二枚かみから生えた一本の角。

そしてその巨大な肉体2mはあるであろうその肉体はまるで幽鬼が如く猫背に曲がっており、四つん這いになつてこちらに近付いてくるその姿は悪魔そのものだった。

「ティアボロモン」

悪魔の名はその様な名前だった。

かつて、この世界を破壊しようとした悪しき存在。

伝説の神話で出てくる様な悪魔の存在にアグモンは両手に抱き締めていたツノモンをゆつくりと放すとその前に立ち塞がつた。こいつには指一本触れさせないとでも言つ様に。

「兄ちゃん!?

「大丈夫だ。守るから。俺が」

「マモ…ル? ザコに…ヨウ…ハ…ナイ」

そつ言つと鞭の様な長い爪の生えた右腕をしならせながらアグモンへとティアボロモンは振り下ろす。

凄い風圧が、アグモンのツノモンの横を叩きつけるとそのまま後ろ

にあつた騎士の石像を薙ぎ倒す。

アグモンはかるりじてその攻撃をステップで回避するとその口から小さな火球は吐きだした。

「ベビー フレイム！！」

ディアボロモンの顔に火球はそのまま当たると周囲に煙を撒き散らす。

「やつた！？」

「危ない！！ 兄ちゃん！！」

「えつ～、わあ あああああ～！」

アグモンは喜びの声を上げるが、次の瞬間先程回避した筈のディアボロモンの爪にアグモンの体は凄い勢いで叩きつけられた。アグモンの攻撃など攻撃のうちに入らないとでも言つ様にあえて攻撃を受けたのだろう。

その一撃でアグモンは身体中に今まで感じた事のない位の痛みを感じていた。
動かない。指が一本も…。

「ううう…」

「ココ… イ。シネ」

ディアボロモンはゆっくりとその右腕で地面に倒れ伏しているアグモンを叩きつけようとする。

「兄ちゃんーー！」

ツノモンは、今にも死にかけているアグモンへと立ってくれと叫ぶ

が、アグモンはその体を起き上がらせる気配はない。

ツノモンは先程地面に倒れていた騎士の石像が視界に入ると今まで溜めこんでいた感情が爆発した様に、その瞳に涙が流れ始めるとその石像にポタポタと涙が染み込んでいく。

「たすけて…誰か…たすけて」

ディアボロモンの右腕が無情にも振り下ろされる。
次の瞬間…強烈な音がツノモンの耳を叩きつけた。
ディアボロモンの腕が振り下ろされた音じゃない。
まして、アグモンが死ぬ間際に発した絶命の雄叫びでもない。
その音はツノモンの上空から響いた。
ガラスが割れる音だ。

色鮮やかなステンドグラスが雨の様に、頭から降り注ぐ。
何が起きたか分からなかつた。

それは、ツノモンだけじゃなくアグモンもそして知性があるのかは怪しいがディアボロモンも思つたことだつた。
だが、その疑問は次の瞬間には明かされた。
何か大きな人影が同時に天から降りて來たのだ。
その何かがゆっくりと地面に付けていた膝を立ちあがらせる。
その何かは、まるで騎士の様な姿だつた。
白いその体は細身でいて、だがどこか力強さを感じさせる流麗さを持つており、その左腕には黄金の龍を模した籠手が、右腕には青い狼を模した籠手が装着されている。

そして、その背中には真紅のマント。頭部はやはり綺麗な流線形の兜の様な頭部であり、そこには力強い一つの瞳が覗かれる。

「ギギ…オマエハ…」

その体から放たれる威圧感は目の前の悪魔「ディアボロモン」をも

威圧する程の存在感をその場にいるモノ達に与えた。

だが、だからこそ…アグモンはツノモンは安心していた。

もう…大丈夫と。

ツノモンは、地面に転がっていた石像と目の前に現れた騎士を見比べる。

(「伝説は本当だつた。騎士様は存在する」)

* * * * *

白き騎士

その正体はこの世界で絶対の正義を司る“ロイヤルナイツ”的一人“最後の騎士”の名を持つオメガモンと呼ばれる騎士だつた。

この世界…ネットワーク上に構築された世界。

名をデジタルワールドといい、そこには人間と呼ばれる生命体は存在しない。

だが、そこに唯一一つ存在する生命体がいた。その生命体の名は「デジタルモンスター」

通称デジモンと呼ばれる存在である。

その種類は数多く存在し、オメガモンもまたそのデジモンの一員だつた。

だが…このオメガモンは普通のデジモンとは違つた。

過去に起きたある事故が原因で人間の命をその体に取り込んでいたのだ。

そして、その意識は現在、その取り込まれた人間…ハ神一真のモノとなつていて。

そしてこのハ神一真という存在は、人間の中でもとりわけ異彩な人間だつた。

転生者…。

前世での記憶、経験を有しているという特殊な出で立ちを持つ人間

だった。

現世では、8歳という小さい肉体を持ちながらその肉体の持つ経験と知識は既に成人男性の所有するモノと変わらなかつた。

そして、なにより一真は前世でデジタルワールドをアニメという形で観測出来る世界に存在していた。

その為、自身がオメガモンになつてしまつた後、自身がどういう存在となり、何をするべきなのかも自然と理解はできた。

だからこそ、この1年。一真はオメガモンとして、この世界を周り続けこの世界の平和の為に戦い続けた。

そして今尚、オメガモンは悪しき存在を感じ取り、この村へとやってきた。

今この世界を覆いつくす未曾有の危機に関連している存在だと思ったからだ。

そしてその彼のその勘は正解だつた。

既に、廃墟と化し始めている村。

間に合わなかつた…。

このオメガモンという新たな命を手にした第3の人生で初めて感じた絶望だつた。

だが、村はずれにある教会から悪しき存在を感じ取ると同時に何か小さな生体反応を感じ取ることができた。

「生きているデジモンがいるのか？」

そう思つとオメガモンは、その体を急いで空から教会へと突撃させる。

そして、今現在、悪しき存在「ティアボロモン」と相対して教会内で立つっていた。

「ギギ…オマエハ…」

そう言つ「デイアボロモン」を前にオメガモンは自然と反応をかくにんした小さな命を確認する。

彼の背中でその姿に見惚れている幼年期と呼ばれる人間でいう赤ん坊にあたる世代の「デジモン」であるツノモン。そして「デイアボロモン」の足元で倒れている成長期と呼ばれる人間でいえばまだ子供と言える位の世代のアグモンが目に入る。

前者の瞳は未だ涙の跡が残り、どれだけの恐怖がこの子を襲つたのか容易に想像がついた。

そして、なにより倒れ伏しているアグモン。その体は激しく地面に叩きつけられたのだろうその体には痛々しい傷跡が体に残つていた。

(「守りたかったのか？ツノモンを」)

弱肉強食の世界のこの「デジタルワールド」で自らの命をかけて誰かを守るという行為を行う「デジモン」は言つ程多くない。
確かにそういう「デジモン」は存在するし、そういう「デジモン」が作り上げた街や村も存在する。

この村もその一つだったのだろう。

だが…それでも成長期の「アグモン」が究極体と呼ばれる弱肉強食の生存競争に勝ち抜きその肉体を極限の強さまで進化させた世代の「ディアボロモン」に戦いを挑むなど…。

(「無謀過ぎる…だが」)

恐らく、この村にいた「デジモン」は少しでも若い世代の「デジモン」を救おうとしたのだろう。

無謀だ…。

オメガモンに成る前から分かつている。

力が無ければ守りたいモノも守れない…。

これはまだ一真だったころの世界「リアルワールド」でも同じ事が

いえる。

だからこそ…嫌でも。

(「理解は出来る」)

この村のデジモンがどういう思いで戦っていたのかを…。
このアグモンがどういう思いで戦っていたのかを…。

このツノモンがどういう思いで救いを待っていたのかを…。
自分もかつては同じ様に唯無力な唯の子供だったのだから…。
守りたい人を…守れなかつたのだから…。

同じなのだ…オメガモンに成る前の自分と…彼等は。

そう思うと自然と怒りの炎がオメガモンの胸に灯り始める。

「ギギ…シネ。 オメガモン」

そう言ひこちらに飛びかかつてくるディアボロモンをオメガモンは左肩に装着された盾「ブレイブシールド」で受け止めると、そのままその体を弾き返す。

「死ぬのは貴様だ！」

空中で体勢を崩したディアボロモンの追い打ちをかける様に右ストレートをその胴体に打ち込む。

拳を浴びたディアボロモンはそのまま自身が空けた教会の壁の穴から吹き飛ばされて外へと放り出される。

ツノモンとアグモンが驚いた様にその瞳を大きく見開く。
自分達が敵わなかつた相手をいとも簡単に殴り飛ばしたのだから無理はないが、オメガモンはそれを気にする間もなく、自身も同じ様に穴を潜り抜け外へと躍り出た。

狭い教会内では自身の技は最大限に使えない事と、アグモンとツノ

モンを巻き込んでしまつと思つたからだ。

外へ出ると、ティアボロモンは倒れていた体を起して、ひざを睨みつけていた。

周囲が廃墟とかしたこの場所なら、被害を気にせず戦える。この村には、もう守るべき命も居ないのだから。

オメガモンは左腕の龍の顎から文字の刻まれた剣“グレイソード”を出すと、その刀身に紅蓮の炎を灯らせる。

「グレイソード……！」

ティアボロモンの懷に飛び込むとそのまま横に一閃。グレイソードを振るひ。

「ギャアアアアア……！」

ティアボロモンはその動きを察知したのか胸元を両腕で庇うが、その腕は無残にも炎の宿ったグレイソードに切り裂かれ、そのまま黒い血しぶきを上げながら絶叫を上げる。

悪魔の名を冠しているだけあって、その血もやはり黒く悪魔そのものだ。

オメガモンは再びグレイソードを振るおつとする。

「ヤラセン……」

「何つ……？」

切り裂いた筈の腕がオメガモンに絡むとグレイソードの刀身を覆いすくへます。

「ギギ……ロスト……」

「マズイ……ガルルキャノン……」

その一言と同時に絡みついたディアボロモンの腕が急に膨れ上がるのを確認するとオメガモンは右腕の狼の顎から巨大な黒い砲身を吐き出し、それをディアボロモンに向ける。

この距離では、強大なガルルキヤノンの威力で自身も傷つくだろうが、恐らく奴は自身の腕を自爆させるつもりだ。

こちらだけ強大なダメージを受ける訳にはいかない！！

奴は手だろうが足だろうが千切れていっても直ぐ再生する。そう考えるとこちらが圧倒的に不利になる。

それだけは避けねば。

そうオメガモンは考えた。

至近距離からのガルルキヤノンの拡散砲はオメガモンもろともディアボロモンを吹き飛ばす。

「……」

「ぐう……」

爆散する煙の中オメガモンは、発射の勢いで後方へ弾き飛ばされる。その体は全身に被弾の跡が残り、身を守るマントも所々ボロボロになっている。

だが、「え？」ディアボロモンに対するダメージも相当なものだった。体全身から黒い血液を噴出するその姿は見ているこちらも痛々しい。

「ギギギギギギギ……！」

ディアボロモンは、不気味な声を上げながらその場で体を固定するとその胸元に強大なエネルギーを収束し始める。

「つー！ その体で大技を放つ氣か！？」

「カタストロフィーカノン」

「やられるとか！ガルルキヤノン……」

オメガモンも再び、ガルルキヤノンを構えるとそのままディアボロモンへエネルギー弾を発射する。

ディアボロモンも肉体を崩壊させつつ、その胸元から黒いエネルギー波を発射する。

二体の中心点で凄まじいエネルギー同士がぶつかり合へ。

白と黒。

相対する二つの属性の力がぶつかり合つとその中心点で次の瞬間ありえない現象が起きた。

「……な、なんだあれは」

穴が空いていた。

バチバチと言いながら凄まじいエネルギーがその穴から漏れ始めている。

「ギギギギギギ……」

ディアボロモンは滅びゆくその体を無理やり立たせるとそのままその穴の中へと飛びこむうとする。

「待て……ディアボロモン……」

ガルルキヤノンを再び、構えるがディアボロモンはその姿をその穴の中へと消していた。

「くそ……いくしかないか」

これは恐らく、時空の歪み。

強大なエネルギーが時空も歪ませる事があるのを転生前の記憶から
引っ張り出す。

そして、その先は別の世界へ通じている事も…。

ディアボロモンが行く先の世界で破壊の限りをいくすのは目に見え
ている。

その瞬間オメガモンの頭の中で、過去に起きた事故の事が横切る。
自身がオメガモンになったあの事故の事を…。

「…あんな事一度と繰り返させてたまるか。ん？」

そう思い、時空の歪みへと足を進めようとした時、後ろの教会から
傷ついた体を引きずりながらアグモンが、ピヨンピヨンと元気に跳
ねながらツノモンがこちらに近付いてきた。

その瞳はキラキラと輝き、まるでその瞳は神を見るかの様な目だ。

(「俺は某ガンダムか？神なんかじゃないぞ」)

そうメタな発言を心の内で呟くとこれからこの子達の将来が気に
なった。

これではこの村で生活するのは不可能だらう。

このあたり一帯はディアボロモンに破壊されてしまった。

デジタルワールドは弱肉強食。

その本質に変わりはない。

この子達は今ここでディアボロモンに殺された方がマシだったとい
う人生を送る事になるかもしれないのだ。

(「所詮偽善…だよな。単なる自己満足。それでも…俺はオメガモ
ン。ロイヤルナイスなんだ」)

ロイヤルナイスとは、オメガモンが所属しているグループの名であ

り、ネットワークセキュリティの最高位のメンバーの事を指す。しかし、ロイヤルナイツは騎士団と名乗っているがその実、組織的に動く事は殆どない。

それは、正義という概念は人それぞれであり、それはロイヤルナイツといえど変わらないからだ。

その為、ロイヤルナイツは皆自身の正義の許に行動を起こしている。それはオメガモンである彼も同様だった。

偽善でもいい。自己満足でもいい。

その時を、少しでも世界を平和に出来ればとそう思いオメガモンは行動を起こしていた。

せめて、この子達のこれから的人生に幸あれと思い、軽く二つの手で一体の頭を撫でると、そのまま時空の歪みへとオメガモンは飛びこんだ。

* * * * *

ディアボロモンは去り、アグモンとツノモンは生き延びる事が出来た。

自分達を救つてくれた白い騎士の様なデジモン。

一体はあの姿のデジモンを良く知っていた。

教会の中、地面に倒れている石像へと一体は視線を向ける。色んなデジモンが聞かせてくれた。お伽噺。

救いを求める声あれば現れる正義の味方のお伽噺。

「兄ちゃん」

ツノモンはアグモンへ話しかける。

「ああ…。今のデジモンは正義の騎士だ」
オメガモン

* * * * *

「つと…！…！」

時空の歪みに体を飛びこませたオメガモンは、自然とその体を別世界へと移動させられた。

歪みからその白い巨体をぐぐらせると外へと飛び出る。相も変わらず、バチバチいつているが、その歪みは自然と収まり消滅していく。

「…」

オメガモンが足をついたのは、見慣れた世界だった。

アスファルトで舗装された道路。

人工的に建てられたビル群。

「リアルワールド…現実世界に繋がっていたのか」

てっきり並行世界のデジタルワールドに飛ばされたと思つていたがそうではなかつたらしい。

久しぶりに踏む人工物の足元に懐かしさを感じながら、周囲を見渡す。

見覚えのある建物がいくつもある。少しばかり、建物は増えているが忘れようが無い。

「…帰つて来たのか。俺は。海鳴市に…」

「…」

オメガモン…いやハ神一真が生を受けた第2の故郷だつた。

正確には魔法少女リリカルなのはと呼ばれる物語の世界なのだが…。

一真として生まれた彼はこの世界に転生していたのだ。

残念ながら、その物語に関する記憶は転生してから既に失われていたが…それでもなんとなくここがその物語の世界である事は自覚していた。

「だが…おかしい。何故人が一人もいない?」

オメガモンとしての感覚が伝える。ここには人が誰ひとりとしていない。

それに何か妙な違和感を感じる。

何かこの辺り一帯が得体のしれない力で包まれている様なそんな感覚だ。

「…ディアボロモンの仕業か?」

そう思つたがその考えは直後に曖昧なモノとされる。
何か強大な力を感じる。しかし、これは…デジモンのものじゃない。
だが…オメガモンはこの感覚を知つていた。
どことなく懐かしくて、それでいて切なく感じるこの感覚。
そしてもう一つ…。

「これは…?僅かだが…感じるディアボロモンの感覚だ」

すると、極限まで強化されたオメガモンの瞳が遠くのビルで煙を上げているのを確認する。

そこでは、白い少女と赤い少女が激突していた。

彼女たちだ。今の感覚は。

赤い方から感じる。本当に僅かだがディアボロモンと似た感覚を。

そしてもう一人の白い少女にはとても懐かしい感覚が流れ込んでくる。

「そうだ。俺は知っている。彼女を…」

名は高町なのは…。

かつて一真として接していた友人だつた。

そう感じると、オメガモンはボロボロになつた背中のマントを展開させ、空へとその体をあげる。

何故彼女があんな所でみんなコスプレじみた姿をしているのかは分からぬが…。

それでも相手の赤い少女からディアボロモンの感覚が僅かだが感じられる。

放つてはおけなかつた。

この時、オメガモンは思つてもいなかつた。

この出来事が切つ掛けで、これから先の彼の人生がガラリと変わることを。

交わる筈のない世界の力が交わる時新たな伝説が生まれる。
魔法少女リリカルなのは の騎士 始まります。

プロローグ（後書き）

物語は、a' sから始まります。

主人公はオメガモンこと一真です。

一応、人間の姿にもなります。

次回にでもキャラのプロフィールを書こうと考えています。

後、私、デジモン見てたの大分前なものですから… 設定とか少し公式とは違うかもしれませんのが御理解の程よろしくお願いします。

感想やアドバイスがございましたら宜しくお願ひします。

1話 亂入（前書き）

大分遅くなりました。
すいません。

「なんなの。一体！？」

星々が輝く夜の闇の中。桜色の光が無規則な軌道で空を翔る。その正体は茶髪の髪を可愛らしく一つに結つた、その髪型相応のまだ幼い少女だ。

それだけなら、どこにでもいる10歳程度の少女だが、彼女が唯の小学三年生でないというのは今の彼女の姿を見れば一目瞭然だ。空を翔るという行為もそうだが、その服装は、普段着にしては少々目を引く格好であり、純白のその服装はどこかのアニメや漫画に出てきそうな魔法少女様な現実見のない格好に良く似ている。そして決定的なのが彼女の左手に握られている杖だった。赤い宝石を先端に宿した一本の杖。

彼女の名前は「高町なのは」。

手にするのは魔道士の杖インテリジェントデバイス「レイジングハイター」

春先に起きたとある事件が切っ掛けで、魔法と呼ばれる力と出会いミッドチルダ式の魔法を扱う事になった魔道士だ。

春先以来、なのはは毎日魔法の鍛錬は続けていた。そして、その力はある時よりも強くなつたと自分でも思う。だが：それは、再会を誓つた新たな友人の為、僅かだが見えてきた本当に自分がやりたいと思つた夢の為に鍛えた力だった。それをまさか、こんなに早くそれも突然身の覚えもない女の子に対して振るう事になるとは思いもしなかつた。

「いきなり襲いかかられる覚えはないんだけど。どこの子？一体なんでこんな事するの！？」

なのはは、自身を襲いかかつてきた襲撃者に対して問い合わせる。何故この様な事をするのかと。

だが、対する襲撃者は、その問い合わせに答えず、そのままゆっくりと掌を開くとその指の間に一つの金属の玉の様なモノを出現させる。彼女もまたなのは同様、その姿は日常的に着るにしては随分と派手な衣装だ。

赤いフリフリのついたドレスに両サイドにウサギのマスクコットがつけられた帽子。

赤い髪を見つ編みにしたその姿はなのは同様10歳前後の少女に見える。

だが、その可愛らしい容姿とは裏腹に、なのはを見つめるその瞳は明らかな敵意を持つており、その両手に握られている銀の鉄槌もそれに呼応する様に鈍く輝く。

「教えてくれなきゃ分かんないってばー！」

なのははそう叫びながら、自身もレイジングハートを振るうと先程発射した魔力弾を操作し、目の前の少女の背後から不規則に弧を描きながら襲い掛かる。

それに気付いた赤い少女は一発目を体を捻る事で避けると体勢を崩したためか二発目は鉄槌を構えるとその前方に剣十字のなのはとは違う魔方陣の障壁を張る事でその身を守った。

爆散する煙の中、思わず反撃を受けた少女性はなのはを睨みつけるとそのまま両手で鉄槌を握りしめると一瞬でなのはとの間合いを詰めるとそのまま振り下ろす。

だが、対するなのはもいや…彼女のデバイス、レイジングハートがいち早く察知したのかすぐさま、自らの主の足元に展開している翼状の飛行魔法「フライアーフィン」に魔力を込め、「フラッシュムブ」呼ばれる高速移動魔法を発動し、再びその間合いを開く。

なのはの得意とする魔法はミドルレンジとロングレンジでこそ発揮

する射撃魔法と砲撃魔法だからだ。

そして、自らの主の得意とする魔法を発動する形態へとレイジングハートはその姿を変える。

Shooting mode

Divine

「話し。聞いてつづれば……」

Buster

レイジングハートに桜色の4つの環状の魔方陣が取り巻くと魔力を増大させていく。次の瞬間巨大な桜色の光が赤い少女へと放たれる。何とかそれを彼女は回避するが、その際に頭に被っていた可愛らしいウサギのついた帽子が吹き飛ばされると同時にウサギのマスクットが千切れながら地面へと落下していく。

「くつ……！」

「ふえ……！？」

無表情で鉄槌を振るつていた目の前の少女が見せた初めての感情には一瞬たじろぐ。

その瞳は明らかに怒りに染まっており、その怒りの原因は間違いなく今のはが叩き落とした彼女の帽子だ。

なのはは、少し悪い事したかなと罪悪感に囚われ始めるが次の瞬間目の前の少女は足元に再び赤い剣十字の魔方陣を展開させる。

「グラーファイゼン！！カードリッジロードー！」

Explosion

少女が発したグラ ファイゼンと呼ばれた鉄槌が主の声に答える様に力強く叫ぶとそのボディから煙と同時に弾丸を吐き出すとその姿をなのはのレイジングハート同様に変える。

RaketenForm

先程までと違い、ハンマー ヘッドの片方が推進機の様な形に変わり、もう一方にはスパイク状の突起物が装着される。

先程までと違い、その手に握られるグラ ファイゼンのその姿はより破壊に特化した形態。なのは容易に想像が出来た。

「ええっ！？」

だからこいつ、なのはは驚きを隠せなかつた。

自分とはまるで違う魔方陣、見た事もない弾丸を排出して変形する近接戦闘に特化したデバイス。

これでは、魔道士というよりも…騎士ではないかと。

「ラケー テン…！…！」

そんなんのはの事などお構いなしに赤い少女はその場で噴射機に炎を灯すと、その勢いのまま小さい体を何度も何度も回転させる。そしてその回転を利用した勢いで一瞬でなのはの目の前へと飛びこむと勢いに任せてなのはへと横から叩きつける。

「う…」

怒りの叫びを上げながらハンマーに魔力を込める少女に対し、なのはその場でバリアを開くがそれも張った意味などないと言わ

れる様に一瞬で破壊されると咄嗟に前に出したレイジングハートのボディをガリガリと削りこむ。

「ハンマー……」

「きやあああ……！」

少女の叫びと共にハンマーが完全に横薙ぎに薙ぎ払われるとそのままのはの体ごと後方へと吹き飛ばす。なのはは悲鳴を上げながら空中で体を回転しつつ吹き飛ばされ次に来るであろう衝撃に備えた。

弾きとばされる先にあるのは一つのビル。

このままビルの壁にぶつかるか、それとも窓ガラスをぶち破る事になるのか。

どちらにせよ、バリアジャケットと呼ばれる魔法で出来た防護服を見に纏っている為、大した怪我はないだろうが、叩きつけられるという事実に変わりはない。

春先に起きた事件で危険な目に何度も合っているとはいえ、なのはもまだ9歳の少女なのだ。

恐いという感情までは、例え魔法でも書き消す事など出来はしない。だからこそ、衝撃に備え目をつむってしまう。

だが、その訪れるであろう衝撃は思ったよりも強くなかった。壁に激突したにしては、体のどこもいたくないし、窓ガラスを叩き割った様な音もなのはの耳には届いてこなかった。

「？」

なのはは訝しげなら、恐る恐る瞑つていた瞳を開く。

「……」

そこには、先程まで敵対していた赤い少女が空中で無言で立ち去り、呆けている姿がそこにはあった。

何が、そこまで彼女を呆けさせているのか…。なのはは、その時自身が未だビルにぶつかることなく空中にいることに気付いた。

そして自分の体が誰かに受け止められている事にも。

「大丈夫か？」

「へっ…？」

突如、なのはの耳に届いたのは、先程まで敵対していた赤い少女でもなく、若い男の声だった。自然とその視線はゆっくりと声の主へと向けられる。

そこにいたのは、自分なんかよりも大きな体の持ち主だという事が理解できた。

白い体に白と赤のマントを見につけた騎士。

突起状の装飾がつけられた流線形のマスクから覗かれる二つの瞳がこちらを見つめていた。

* * * * *

状況がまるで掴めなかつた。

何故、なのはが空を飛んでいる？

あの格好と手に持つ杖はなんだ？

あの魔方陣みたいなものはなんだ？

杖から出たビームはなんだ？

何故なのはが戦っている？

敵対している少女は何者だ？

何故ディアボロモンの感覚が彼女からする。

先程の戦いで痛むボロボロの体に鞭を打ちながら飛行するオメガモンの思考は混乱していた。

確かにこの世界は、普通の世界とは違い、何らかの物語の世界である事は知つてはいたが、まさか自分がその物語に関わるなどと思ひもしなかつた。

なにより、あの高町なのはがその物語の登場人物など想像もしていなかつた。

(「これも何かの運命なのか?」)

自分が転生体という存在である事を自覚してから自分の人生が平凡なモノで済む筈がないというのは薄々は感じてはいた。だからこそ、あまり一真はこの世界であまり交友関係というモノを作らなかつた。

恐かつたからだ。本来ならあり得ない存在。それが一真であり、オメガモンだ。

その存在が世界にどんな影響を与えるか…。何故かは知らないがこの世に一度目の生を受けてから、ずっとそんな不安が常に胸の内にあつた。

そしてその不安が杞憂のモノではなく、事実だという事を知ることになつたのは両親を失つたあの事故だったのは最悪の代価だったと今でも思う。

だが…そんな一真が、何の気まぐれか、いや…一真が自身を偽善と呼ぶが故に起こした行動の結果友人として関係を築いてしまつたのが、『高町なのは』だつた。

その彼女がまさか…何よりリアルワールドに戻つてきて早々に自分同様普通ではない力を振るつてゐる等…まるで出来過ぎてゐる。まるでオメガモンの八神一真の人生は全て何者かの掌で踊らされてゐる様で薄気味悪い圧迫感が胸に宿つた。

「大丈夫か？」

だが…今は目の前の事実を受け入れ、何とかするべきだ。

今の一真是ロイヤルナイツのオメガモン。

デジタルワールドの不始末はデジタルワールドの住人が解決すべきなのだから。

オメガモンは、視界に入る少女達の戦いに乱入するべくその体を加速させると吹き飛ばされたなのはの体を受け止めると語りかける。

「あつ…はい」

なのははそう答えるのがやつとらしく、その顔には驚きと戸惑いが手にとつてみれた。

まさか、今の自分が一真とは思わないだろ^{オメガモン}うなど心の中で微笑した。

「あの…あなたは一体…」

「話^{オメガモン}しは後だ」

「えつ？うわつ！」

赤い少女が呆けていた顔を引き締めると再びここからに向かって飛びこんでくるとハンマーを振り下ろしてきていた。

オメガモンはなのはを抱きかかえたまま後方へと下がる。

少女は、攻撃を外した事に苛立ちを感じる様に「チッ…」と舌打ちをする。

「テメエ…。何者だ。そいつの仲間か？」

「違う」

その言葉になのはは一瞬顔を恐がらせる。

その表情を見てオメガモンは少し心がチクリと痛むが、ここでな

はの仲間と肯定すれば田の前の少女に話しを聞く事は確実に不可能になる。

「なら、なんなんだ！邪魔すんな！」

「俺は君に聞きたい事がある。まずはその物騒な凶器を降ろしてくれないか？」

出来るだけ穏便に事を済ませる為了だつた。

「はあ？ そつちにあつてもこつちにはねえ……」

だが……そのオメガモンの氣遣いも田の前の少女には邪魔以外の何物でもなかつたらしい。

問答無用で再び、片方のハンマー^{ハンマー}ヘッドに再び炎を灯すと体を回転させる。

その行動になのは顔を恐がらせる。

「逃げてください……あの子の狙いはわたしだから」

そう言つとなのははオメガモンの腕の中から抜けだそつとする。

「……相変わらず自分を大事にしない奴だな。お前は

「えつ？」

オメガモンは苛立ちながら口にすると抜け出そつとするなはをそのまま抱き締めながらボロボロのマントをなびかせ、左腕を横へ振るい、グレイソードを籠手に装備する。

その行動と発した言葉になのはは驚きの表情を浮かべるが、次の瞬間にオメガモンの攻撃への動きが始まっていた。

「ラケーテン……」

「グレイ！」

少女とオメガモンは自身の武器を勢いよく田の前の存在へと振るいながら叫ぶ。

「ハンマー……」

「ソード……」

少女は小さい体を勢いをつけながら、オメガモンへとハンマーと叫つけようとする。

だが…その勢いを得た筈のその小さい体の勢いがどんどんと失われていく。

「な、なんだよこれ！？」

視界に入ったのは紅蓮の刃。

そしてその向こうには先程とは違い左手の剣を薙ぎ払つた構えで佇むオメガモンだった。

グレイソードを振るい、その風圧がグレイソード独自の炎を纏つたまま目の前の少女へといや…その手元のハンマーへと叩きつけられている。

噴射機が少女の魔力を糧に、より大きな炎を灯し勢いを増すがからうじて押し込む事が出来るだけでその場から先に進む事が出来ない。そして、その得た筈の勢いは最終的に目の前の紅蓮の刃の消失と共に全て殺された。

「凄い…」

なのははオメガモンの腕の中で呆然と呟く。

オメガモンは、目の前の少女のハンマーへと攻撃をしたのだ。

あくまでハンマーのみを狙い、そしてその攻撃の目的は目の前の少女の武器であつた噴射機による勢いが産む圧倒的な勢い。

それを殺す事のみで目の前の少女に傷をつけずにその攻撃を殺したのだ。

「…やけんな」

「えつ？」

なのはは、目の前の少女が顔を伏せ、静かにそう呟く言葉を聞いた。次の瞬間ゾッとする様な寒い感覚がなのはの体を覆った。

「ひつ……」

そして、少女の勢いよく上げた顔には明らかに怒りが灯っていた。手加減された。

その行為が何よりも許せなかつたのだろう。

「ふざけんなああああ……！」

その叫びと共に先程とは違い、噴射機の勢いを利用もせず唯がむしやらにハンマーを叩きつけてきた。

ハンマーと呼ばれる打撃武器は圧倒的な破壊力を持つがその破壊力を活かすにはとても高い技量が求められる。

唯唯、破壊力のみを求めた武器。それがハンマーだ。

破壊力を産む為に重量を増大させる。しかしそれにより使用者の動きは鈍り、当然ながらそれだけの重量を支える為には両腕も塞がる。また、一撃一撃を振るうにも多大な体力を消費し、もしその一撃を外せばその瞬間一瞬にして無防備となる。

一撃必殺。

それがハンマー使いの戦い方であり、目の前の少女の本来の戦い方の筈だった。

現に先程までの彼女の振るう一撃には油断ならないモノがあつたとオメガモンは思う。

なのはに与えた一撃、一見横から勢いを利用して殴りつけただけに見えるが、あの小さい体であれだけの勢いの中ハンマーを両腕から外さず、的確に当てるべき場所へとハンマーを持つていく。

それが、どれだけ難しい事か…と少々驚いた。

オメガモンは以前、ハンマーを使うズドモンと呼ばれる海獣型デジモンと戦つたことがあるが、勢いを利用したハンマーの一撃には油断ならないモノがある事を学んでいた。

一撃で流れをひっくり返す。そんな可能性を秘めているのだ。ハンマーという武器は。

しかし、今繰り出される攻撃にはそんなモノは欠片も見当たらなかつた。

(「プライドを傷つけてしまったか?…だがここで彼女の命を奪う訳にはいかない」)

ディアボロモンの手掛かりである事もそうだが、正体を隠しているとはいえたのは目の前で命を奪うという行為をしたくなかった。それ以前に目の前の少女の必死の形相を見ていると彼女も何かに抗つて戦っている様にも見えた。

やはり…自身は偽善者だと自覚する。

目に届く範囲で誰かの力に成りたい。そう思つてしまふのだ。

(「とはいえる大人しくやられてやる訳にもいかない!…なんだ!…」の感覚)

オメガモンは再びグレイソードを構え、その一撃をやり過ごそようと

構えるがその構えも無駄に終わる。

何か妙な感覚と共にこの空間に何かが現れるとそこから黄金の刃がチャクラムの様に弧を描きながら、オメガモンと少女の間の空間を引き裂くように通り過ぎる。

赤い少女は咄嗟にその場で足を踏みとどまらせその刃を回避するが、その顔には明らかに苛立ちが見えた。

対するなのはの瞳には、信じられないモノを見る様なそれでいて喜びの光が灯っていた。

「誰だ！…姿見せろ！…」

赤い少女のその言葉と共に、闇夜の中をオメガモンと赤い少女の中間地点に新たな乱入者が姿を現す。

(「あの子は…誰だ？」)

オメガモンに見覚えがない少女だった。
歳はなのはとそう変わらないだろう。

金色の長い髪を黒いリボンで二つに結い、なのはとは対照的な黒い防護服を身に纏い、その手には金色の光で形成された死神の持つ鎌の様な刃を形成した杖が両腕でしっかりと握られている。

「フェイトちゃん！…」

なのはが驚きながら、かつ嬉しそうにその少女の名前を呼ぶ。

その声に先程まで研ぎ澄まされていたフェイトと呼ばれた少女の真紅の瞳が一瞬優しく揺らぐが、再び目の前の赤い少女へ、そしてオメガモンへと敵意が向けられる。

(「なのはの知り合いか？…どうやら俺も敵の一人と考えられてる

「うしこな」

正体不明の存在がいれば警戒するのは当然かと心の中で呟きながら
オメガモンは溜息をつく。

「くつ…仲間か！？」

赤い少女は自分が悪そくに顔を歪ませると後ろへと飛び去り距離を取
る。

「…友達だ」

フュイトは静かにそつそつと赤い少女へとその金色の刃を突きつけ
た。

1話 亂入（後書き）

プロファイールは、また今度に…。すいません。
感想アドバイス等があればよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7763k/>

魔法少女リリカルなのは の騎士

2010年10月8日15時08分発行